

算命学中庸

【初年】 4 6 回目

4 6 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【十二大従星力学】 ⑥

【初年】 4 6 回目【十二大従星力学⑥】 01

□ 十二大従星力学（じゅうにだいじゅうせいりきがく） ⑥ 回目

⇒ 天極星（てんきょくせい）

天極星 — 死人

天極星はあの世とこの世の中間の時代だと、45 回目に出てきましたけど、中間とはどのような時代なのかと

ということが、私たちにはなかなか理解がしにくいわけです。

そこで、この時代がどういう時代なのか、つぎのように分けて考えます。

天 極 星	〔	肉体 ⇒ 無
		精神 ⇒ 有

肉体と精神とに分けます。

『天極星』の時代は、この世における肉体は死んで、精神が解き放たれた霊魂として、空間をさま迷っている時代です。

肉体の存在は無いので、肉体が強いとか、弱いとか、そのことは問えません。精神だけが残ります。

これが天極星の時代の特徴になります。

普通に考えれば、精神だけの状態ですから、天極星をもっている人は、精神的に強い人になるはずですし、精神分野にも向いているはずです。

精神的に強い

精神的分野に向いている

このように考えることができますけど、もう少し深く掘り下げます。

肉体が無くて、解き放たれて魂が空間をさま迷っている時代の特徴はなんなのか……と考えます。

〔たとえば〕この世で置き換えると、私たちが「どこかへ行きたいなあ」と、心で思ったとします。

どっか旅行にでも行きたい、あるいは、早く家に帰りたいとか、その場所はどこでも構いません。

いま行きたいと思ったのに——いますぐに、その場所へ行きつくことができません。

それは何故でしょう？

〔たとえば〕アメリカに行きたい、いますぐ行きたいのです。

ところが——少なくとも、これから成田まで行って、飛行機に搭乗して、10何時間ほど機内に閉じ込められて、やっとロスアンジェルス国際空港に到着します。成田を発着してロスに着くのは、日本時間でいえば、明日になってしまいます。

日本を12日の午後に離陸すれば、現地への到着はおなじ12日の早ければ早朝です。

そうしますと、アメリカに行くには、リムジンバスか、成田エクスプレスに乗って成田まで行って、空港のカウンターで搭乗手続きをして、荷物を預け、移民局でパスポートの確認を受けて、それから搭乗口の待合所まで行って、搭乗できるまで待機して、また搭乗券の確認をされて、やっと機内に入れるわけです。機内に入っても、飛行機が飛び立つ時刻まで席に座って待ちます。

それを考えると、行きたいという思いが消えてしまうかもしれないですよ。

いま行きたい——と思ったら、すぐ行きたいのです。しかし、どんなに急いだって、飛行機に搭乗しても、アメリカまで行くのには、9～10時間はかかります。

今日は疲れて、家に早く帰りたい、早く家で横になりたいと思っても、いますぐ家で横になれません。

少なくとも、これから駅まで歩いて、何十分か電車に乗るか、車を運転して行くか、タクシーを利用するかと、でも、家で横になるのは、何十分後か、1時間後かになっちゃいます。それは何故でしょう？

距離があるからですか？

いま、すぐ行けないのは、肉体があるからです。

肉体を飛行機で運ばないと行けません。

肉体を何らかの方法で、家に運ばなければ、家に着きません。

肉体があるがゆえに、この世の人間は、何をするにも制限を受けるわけです。

でも、目を瞑^{つむ}って、心のなかで、自分がいまの瞬間にサンタモニカの海岸に立ち、真っ赤な太陽が、水平線に沈もうとしている光景を観ている自分を想像することは可能です。

可能ですが、実際のその地を見ていないと、なかなか……。

家のなかで、からだをソファーに横たえて、休んでいる自分を思い浮かべることは可能ですね。

肉体が無くて、精神だけであれば、すぐにそこへ移動する。それは可能だと考えているのです。

人間が死んで、死後 49 日のあいだで、七日、七日で、今日は木性、明日は火性を訪れて、あさっては太陽を

訪れるとか、霊魂なら可能であるという考え方をしているのです。

此の世ではできないことでも、霊魂は肉体がないので——行こうと思ったら、もう瞬間的に行けるのです。

地球を含めた5惑星のなかで、地球から1番遠い惑星は木星ですが、瞬時に行けると考えています。

念ねんの速さは、光速こうそくよりも速いとされています。

「一念三千」という言葉がありますが、その意味するところは、人の心はどこへでも通ずるということです。それも光速1秒間に30万kmよりも速くです。

皆様がなにを想う・思うのは自由です。

その想いを描けば、瞬時にして、その世界に到達することができます。それは天極星の特徴になります。

自由な発想ができる

自由な発想ができるのです。

〔たとえば〕普通の人が、なにか仕事をやるにしても、あるいは、趣味でなにかをやろうしても、肉体という

現実的な制限があるために、不可能だと想えるようなことでも、精神で自由に描くことができます。

『天極星』はそういう質を備えていますので、普通の常識にとらわれることなく、自由な発想ができるという特徴があります。

常識にとらわれない

常識にとらわれないものの考え方・発想が出来ますし——パッと閃いたら、パツとなにか解かってしまう、というような感の鋭さをもっている星です。

感性が鋭い



靈感

普通の人物が物を考えるのに、順番に理論立ててこうだから、ああだから、こうだなと考えていく、その時間を超越できますし、距離も超越できるし、途中の経過がなくとも、パツと答えがわかったりする、そういう感性の鋭敏さもっていますので、それがさらに強くなれば靈感になります。

天極星は『十二大従星』のなかでは、最も感応が強い星です。

ただし、天極星をもっているというだけでは、靈感にはならないのです。

感の働きのよい人にはなりますが、靈感にまで^{いた}至れないのです。靈感を発揮するためには、肉体感覚を無にしないといけないと考えています。

肉体がそなえている感覚を無に出来ると、見事な靈感を発揮できます。

ただし、天胡星のところにててきましたが「^{ぜんてんま}禅天魔」の世界です。

〔たとえば〕真冬に山に入って、滝に打たれる滝行は冷たく、痛いです。普通イヤですよ。

だけど、本当に行に集中すれば、滝の冷たさも疼痛も全く感じなくなる、そういう心境が現れるのです。

滝に打たれて、肉体の感覚を全く消し去るようなところまで達すれば、靈感は備わるでしょう。

しかし「禅天魔」の世界ですから、心を空っぽにした隙^{すき}に、ここぞとばかりに動物霊や浮遊霊などの^{あくりょう}悪霊がその人物の意識に入り込む危険性があります。

その人物の心根（心の奥底）と同通する霊が入ります。
そうなると、四次元の世界の者たちですから、三次元
に住む私たちの思いなどを見透^{みす}かします。
それらの悪霊は「わたしは守護^{しゅごれい}霊・指導^{しどうれい}霊だ」とか、
いうようになるでしょうし、“我^{われ}は神^{かみ}なり”といいつの
る悪霊もでてくるわけです。

それは、滝行^{たきぎょう}でなくても、瞑想^{めいそう}して肉体の感覚を無に
できるほどに、集中^{せんじょう}して禅定すれば、それもおなじこ
とです。その人の心根^{こころね}に比例した霊が入って来ます。

その人の心が清らかであれば、真実、守護霊の指導を
受けることができます。

反対に、その人の心根^{こころね}が汚れていれば、自ら悪霊を呼
び込んでしまう危険があります。

〔たとえば〕病気とか交通事故で、その人物が生死の
境を、さ迷ったとき、死んだ自分の親とか、ご先祖様
に会ったとか、幽体離脱して、あっちこっちへ行って
さまざまなことを見てきたとか、おっしゃる方もおら

れます。それはあり得ることです。

霊魂は生と死の狭間^{はざま}を“さ迷って”いるわけです。

意識は肉体を離れ、魂だけが世俗の外を浮遊^{ふゆう}できます。

自分の次元（空間の広がり）より高次元を浮遊することはできませんが、肉体があると行けない所でも、瞬時に行ける（瞬間移動）ということが起こるわけです。

それゆえに“死にそうな経験”をしたりすると、靈感が湧くということもあり得るのです。

算命学は「気」の学問です。

感性に左右されずに、理性で物事を判断していく学問です。その意味では、靈感とは反対の質になります。

算命学は理性

靈感は理性ではないですね。理屈でもないですね。

そこには論理的な説明がつかないわけです。

「なんでわかったの……」といっても、そこに理由がないのです。ほかの人は共通体験ができないので、わからないのです。

算命学は理論がありまして「こういう生き方をしたら

こうなりますよ……」と、その過程を^{こうさつ}考察するものなので。

参考・考察〔よく道理を考えて物事を明らかにすること〕

〔物事の本質や状態などを明らかにするために、調べたり考えたりすること〕

参考・道理〔物事のそうあるべきすじみち。ことわり〕

その代わり、算命学的な『感』が備わります。

鑑定依頼者の話を聞いただけで、その人の生年月日から宿命を出さなくても、この人は、このような人生になって行くであろうということがわかるようになって行くわけです。

最終的には、生年月日から表出した宿命をつかわずにその人物は、こういう結婚をして、男の子が何人生れて、女の子が何人生れて、親と住んでいるか、住んでいないか、そういった事とか、その人物の具体的な生き方から、この人の人生はこのようになっていくと……、占えるようになるのです。

ただし、必ず宿命は出さなくてはいけません。

なぜなら、その人の話が本当であるかどうかの判断は宿命を観ないとわかりません。その人の話したことが

その人の宿命にあっているかどうかは、宿命を観ないとはっきりとわかりません。

宿命は嘘^{うそ}をつきませんが、人間はどなたでも、自己を保存(自分を守ろうとする)しようとする気持ちもっていますから、自分のことは良いように表現します。しかし相手のある場合は、相手の人物のことを、正しく評価しないという場合が多々あります。

でも、その人の関係者の宿命があれば、その判定ができるわけです。

参考・自己保存〔生物が自己の生命を守り発展させようとすること〕

〔自分を維持、発展させようとすること〕

『天極星』は、肉体が無^む、精神だけ有^{ゆう}、そういう状況は、死にかけてはいなくても、普段、皆様は毎日のように経験しています。それは、寝ているときです。

そして、夢を見ているときは、肉体の感覚ないはずで、肉体の感覚がなくても、まるで現実の世界のように感じられます。

人間が眠ってエネルギーを補給しているときは、肉体の活動は停止しています。

でも——精神だけは自由に移動・活動しています。

肉体が無になると、精神は自由に動きまわることが出来ますが、その人の心の次元に比例した範囲です。

夢のなかに死んだ人が出て来たり、何十年前の自分がでてきたり、夢のなかには、自分と想えるさまざまの姿が現れたり、何十年会っていない人物が出て来たり、そういうことも有り得るわけです。

まさに、時間を超越している世界です。

しかし、その夢が正しいとは決まっていません。

夢で観たことが現実になる^{まさゆめ}正夢もありますが、とんでもない夢もあるわけです。

すべての夢が現実になるわけではないのです。

肉体が活動を停止して、精神だけが自由に動きまわるものですから、とんでもない所に行くとか、現実とはかけ離れたことが夢のなかに出て来た。ということも有り得るわけです。

『天極星』は自由な発想ができるといたしました。

自由な発想を思い浮かべるのは天極星の良さでもあるのです。しかし、自由で常識にとらわれないということは……普通の知識・判断力と、大きな隔^{へだ}たりのある考え方をする傾向をもちます。

つまり、実際の事実、状態とかけ離れた考え方をする可能性がある星なのです。

現実とかけ離れた考えをする可能性がある



精神不安定な星

この部分は、天極星をもっている人の精神不安定な質でもあります。

これも天極星の一つの特徴です。

天極星をもっている人は、悪く出ると精神不安定な人になってしまう傾向があります。

順番にこのことを説明します ➡

∞ このことを順番に説明しますと……。

この世の人ではなくて、死んだ後の時代なのです。

肉体と精神とに分けますと、肉体は現実です。

肉体 ⇒ 無〔現実〕

精神 ⇒ 有

肉体を現実というふうに置き換えることができます。

すでに肉体はないので、現実は存在しないのです。

精神だけになっている星ですから、現実にこだわらない考え方ができます。

現実にこだわらない考えができる



情にふりまわされない

言葉を変えれば、情に振り回されない人ともいえます。

死後の時代は、この世で生きる生活とは違いますから、

現実性としての情け・意地・感情などに、振りまわされることなく、物事の判断ができる人です。

それが天極星のよさでもあります。

さきほど、天極星は精神不安定な星でもあると書きましたが、天極星の人は現実の物事に執着をしないほうが、頭も良くなり、感も^さ冴えくるし、星のよさが出てきます。此の世で役立つお金も、彼の世という死後の世界では役に立ちません。

現実的なことに執着しないほうが天極の良さが出る

死者が七日目に渡る、冥土への途中にある「三途の川」を、札束や宝石を入れたバックを抱えて渡ろうとしても、生前の業（ごう）と執着によって、渡る場所も異なるし、死人の衣を奪うといわれる、^{だつえ} ^ぼ ^{けんえ} ^{おう} 奪衣婆と懸衣翁にすべて奪われてしまっていますから、死者は魂だけです。きっと身軽ですよ……

精神的に強いとか、感が鋭いとか、言っていますように、頭が良いし、感性の鋭い星です。この世の現実的な事象に執着しないほうが星の良さがでます。

『天極星』が精神不安定になるのは、現実の物事が、心に引っ掛かって、思い入れをするときです。

現実的なことに、こだわると精神不安定になる

よく死んだ人の魂が、この世に未練（執着）を残していると、なかなか成仏できなくて非常に苦しみますよ。といたりしますが、それとおなじです。

死人なのに、この世の現実的な物事に執着してしまうと、この世に未練を残していますから、なかなか成仏出来なくて苦しむのです。

それと似たようなことが天極星をもつ人に起こります。現実^ににこだわると、とても神経質な人になります。

現実^ににこだわると、他人^{ひと}からみれば……どうでもいいようなこと、忘れて当たり前と思えるようなことに、囚^{とら}われてしまい、神経質・精神不安定に陥ります。

神経質 ⇒ どうでもよいことこだわる

このような質が出ていたら、ダメな天極星です。

すすつと、心がうごく感覚がよいために、些細ささいな部分
(気にしなくてもいい部分)が、とても気になるのです。

非常に神経質になって、結局は精神不安定になります
し、運勢も下がっていくようになってしまいます。

とうぜん、星は輝かがやきません。

『天極星』は死人ですから、この世に執着してはいけ
ません。すでに死んだ時代ですから、自分が死んだら
どうしようとか……考える必要はないのです。

「わたしはこの世には何の未練もありません。もう
何時死んでもいいのです」その心境で生きて行くと、
心が楽になります。

楽になれば、星の良さが出てくるのです。

それなのに、現実のいろいろな物事に執着するようにな
ると、自分の精神がどんどん不安定になり、実力を
だせません。運勢も伸びなくなります。

天極星は現実世界の星ではないのです。

そのことを忘れないでください。

『天極星』 終わります。

⇒ 天庫星（てんくらせい）

天庫星 — 入墓

|

成仏する時代

天庫星は入墓の星です。

成仏する時代と、考えていただくとよろしいです。

それを頭に入れておいて……、

天庫星には〔長男の星〕〔後継ぎの星〕とかの意味があります。それについては後で説明致します。

⇒ まずは——天庫星の性格的な特徴から説明します。

性格的な特徴は『天極星の死人』と比べると、わかりやすいです。

・天極星はあの世とこの世の間を、魂がさ迷っていた時代です。

・天庫星の時代になると、入墓の星ですから、成仏したわけです。

霊魂^{れいこん}は彼の^あ世^よに到着したので、帰るべき所に行き着きましたから、天庫星は精神が安定している星です。

精神安定

魂の抜けた肉体は墓場^{はかば}に埋められて墓標^{ぼひょう}が立ち、あるいは焼場で焼かれて、残存した遺骨はお墓という場所に納骨されます。霊魂も落ち着きました。

そうしますと、つぎのような意味合いがでてきます。

『天庫星』をもっている人は、本質的に精神が安定している星ですから、何か自分が興味のある目的がでてきたとか、現在^{いま}——集中してやりたい事柄がでてきたのであれば、じっくりと腰を落ち着けて、精神をそこに集中させて取り組みたい……そういう特徴を有する星といえます。

それゆえに、物事に対して凝り^こ性^{しょう}の人になりますし、言葉を換えれば、研究熱心な人です。

こり性／研究熱心

参考・凝り性 [一つのことに熱中して、満足するまでやりとおす性質]

何かに……心が惹^ひかれると、じっくり腰を落ち着けて、そのことを調べたいとか、それに没頭したい、そういう質をもっています。

何かに凝^こり始めると、満足するまで、徹底してやろうとします。つまり、凝り性です。

じっくり腰を落ち着けて、物事に取り組むという性質は、気軽にさっと、行動に移さないともいえます。

一つ所に、じっくり腰を落ち着けて、物事をやるのが性に合っています。“腰が重たい”といえるでしょう。

興味のあることについて、落ち着いて十分に観察する

とか、人に訊^きいたりして、念入りに調べたいのです。それは仕事でもそうなのです。

一つ所に腰を据えて、じっくりやると、天庫星の人は伸びます。

仕事も、一つのことに時間をかけてやる

そのほうが伸びる

お墓に遺骨を埋葬してもらうことで、魂が安定するという意味で、精神の安定している星です。

☞ 算命学はお墓の必要性を説きます。

☞ 中庸学は、お墓に靈魂は宿らないとして、お墓の必要性を論じません。肉体は朽ちて地へもどります。現世の修行を終えた靈魂であれば、修行に相応した次元が迎え入れます。

端的に言えば、より高次の世界へ向かう靈魂もおりますし、より低次の世界へ落ちて行く魂も存在します。

それは現世（此の世）での生き様によって決まります。

天国と地獄という言葉がありますように、天界^{てんかい}へ向かう靈魂もいれば、地獄界へ落ち行く靈魂も存在します。

いづれにしても、肉体は此の世の修行（荒波をのり越える）ために必要な『舟』^{ふね}に過ぎないのです。朽ちた舟のお墓は必要ないのです。どちらの説を取るのか……ご自身の判断です。

〔靈魂が落ち着く〕という意味においては、中庸学も算命学もおなじです。

☞ 算命学【天庫星】にもどります。

〔たとえば〕会社であれば、転勤の多い会社には向きません。あっちこっちへと転勤させられると、環境もしょっちゅう変化しますし、人間関係も変わります。そうになると、天庫星がもつ質の良さが出なくなってしまう。

天庫星をもっている人が、しょっちゅう引っ越しをする、転々と仕事変える、そういう生き方をしているようであれば、この人物の運勢は伸びないと思ってよいのです。

⇒ 『天庫星』のものの考え方は“本筋を通す”とか、ひとつの主義・考え方を貫き通そうとします。

筋を通す

一つの考え、主義を貫き通そうとする

このような性質を備えています。

本質的に、上記したものの考え方をする星ですから、人の意見に対しても、「それは筋が通っていない」と、言って怒ったり、不満に思ったりすることも多くなります。 参考・本質的〔本来備わっているさま〕

天庫星をもつ子供は、ひとつの考え方や、主義を貫き通そうとする質をもちますので、小さい頃から、現実的な目標をこの子に与えてあげると、それに向かって

真っ直ぐに進もうとします。

子供は、まだ、自分で物事の是非^{ぜ ひ}は決めることができません。そこは親御さんがよくよく観察して、その子の質を見抜いて、助言を与えたりして、子供がもっている本来の質を伸ばしてあげるとよいのです。

そして、「早く、早くしなさい」と、子供を焦^{あせ}らせることはしないことです。質に反します。

〔たとえば〕「学校の先生になりたい」といったら、〇〇ちゃんが先生になるには、こういう勉強が必要だとか、こういう経験もしておくほうが良いとか、助言を与えると、それに向かって、真っ直ぐ進んで行くようになります。

天庫星の質はそうなのですが、子供にとっては、まだ判断できないのです。

〔たとえば〕将来「学者になったら」というのであれば、それは宿命をだして観なくては、確かなことをいえません。

そこで、ひとつの〔例〕だと思ってください。

この子は学者に向いているのでは……と、思ったら、親御さんが、学者になるという目標を、その子に与え

てあげると、この子は真っ直ぐそこに向かって、進もうとするでしょう。

あるいは、自分の家が商売をやっているのであれば、「〇〇も商売やったらいんじゃないの」と、いったのであれば、その子供は商売・商人に向かって真っ直ぐ進んでいくようになります。

ただし、商人に向いているのかどうかは、宿命を観ないとわかりませんよ。

ここでは『天庫星』本来の質に言及しています。

このような質を備えていますので、親が現実的な目標を与えてあげるとよいですね。

親が現実的な目標を与えてあげると良い

現実的な目標として、具体的に「こういう仕事……」
「こういう生き方……」というようにです。

「これだけ努力すれば、その仕事をやれるんだよ」と、より現実的な目標を与えてあげるといいですね。

しかし、親のほうで、いきあたりぼったりで、その場のなりゆきで言ったとか、思い付きではダメですよ。

後になって、撤回するような目標だと、マイナスになります。

この間までは、商人になるといって、言っていたのに、今年になったら、公務員のほうがいいのか——、そんなことを親が言い出したとしたら、「じゃあ、私は何すればいいの」と、いうことになってしまいます。そうすると、その子の精神が錯乱するようになってしまい、結局、伸びなくなります。

このことは、大人でもあってもおなじです。

大人だったら、親に与えてもらわなくても、自分で、現実的な目標を立てると良いですね。

それがコロコロ変るような目標だとマイナスです。

☞ ここは大切なところです。

天庫星には“長男の役目”とか“家系に対する役目”そういった意味合いがあります。

『天庫星』は、成仏する時代、お墓に入る時代の星と言っていますように……人間の生涯の過程において、最も先祖との関わりが深くなると思える時代を想定し

ますと、『天庫星』の時代が、最も先祖と密接な関係となる時代なのです。

先祖と最もかかわりの深い時代の星

お墓に埋葬される時代ということは……。

〔たとえば〕代々何々家の墓があります。死後、そのお墓に自分が入れば、そこには自分よりも上の先祖が埋葬されているわけです。

自分が死んだら、先祖がいるおなじ場所に入るようになりますから、先祖と最も^{かか}関わりが深くなります。

此の世と^こ彼の世^よと^{かれ}いうことで考えても、自分より先祖のほうが先に死んでいます。

その過程では——すんなりと成仏できた先祖ばかりではないでしょう。それら多くの先祖が通った道とおなじような道を通って来て、自分も成仏したわけです。

成仏したといっても、本当にそこで先祖と出会えるのかどうか、それは不明ですけど、少なくとも、此の世にいる時代よりは、彼の世へ行き着いて成仏した時代のほうが、先祖とかかわりが深くなりますよね。

それゆえに、すべての『十二大従星』なかにおいて、
『天庫星』は、先祖と最もかかわりの深い時代という
意味があります。

⇒ つぎに——この話を此の世（現世）で生活している
人間に置き換えて考えます。

そうしますと、一家のなかで、先祖と最もかかわりの
深い人は誰でしょう？

長男・跡継ぎです。

跡継ぎではない人たちが、家から出て行ってしまうと、
その人たちは、この世において、先祖とのかかわりは
薄くなります。

その家に残って、家の跡を継げば、先祖が代々残して
きた家系を引き継ぐことになりますから、先祖と最も
かかわりの深い生き方をすることになるはずです。

その意味で、天庫星は先祖と最もかかわりの深い時代の
星ということで、長男の星・後継ぎの星、といわれて
います。

天庫星 { 長男の星
跡継ぎの星

普通、長男に生れるとか、跡継ぎに生れたら、その家の先祖の残した物も受け継ぐでしょうし、先祖代々のお墓を、跡を継いだ人物が守って行くようになります。財産とか、お墓とか物質的なことだけでなく、先祖が代々残し、伝えてきた生き方とか、家風とか、そういう無形の様式までも受け継ぐようになるでしょう。ゆえに天庫星には、長男の星とか、後継ぎの星という意味があるのです。

☞ この部分は、誤解を招きやすいのですが……。

「長男はみんな天庫星をもっているのか、あるいは天庫星をもって必ず長男に生れるのか」そんなことはありません。長男で生まれてくるとは限りません。

天庫星をもって女の子に生まれる場合もありますし、次男に生れるとか、三男に生れるとかということもあるわけです。

そこで「この人は次男なのに天庫星をもっているのはおかしい？」と、思ったりする方もおられます。

『天庫星』をもつ人を占うときには、その人が長男の場合とか、次男の場合とか、あるいは、女の子に生まれた場合とかを分けて考えるのです。

個々の状況によって、観方を変えていくのです。

⇒ **長男に生まれて『天庫星』をもっている場合です。**
長男が長男の星・跡継ぎの星をもっているのですから、当然のことですが、この人が一家の跡継ぎになります。家系の後継ぎです。

長男の場合 ⇒ 家系を継ぐ



本人の宿命も家運も安定する

長男に生まれて、天庫星をもっていて家系を継いだら、この人は宿命どおりです。この部分は宿命通りですから、宿命通りに生きなさいということになります。

天庫星をもつ長男が家系を継ぐと、長男の宿命は生きてきます。そうすることで、少なくとも本人の宿命は安定します。通常、家系も栄えます。

家を継ぐべき人が継いだのですから、天庫星の長男が継いだ家は栄えます。

どの程度栄えるのか……これだけではいえないのです。なぜかといえ、宿命のほかの部分の干支も影響してくるからです。

その程度を問えませんが、通常は「家運が安定する」と考えてよいのです。

「家系が栄える」と思っても結構です。

そうしますと『天庫星』の長男が生まれたのに、その長男に出て行かれたら、その家系は衰退していくようになります。

そして、天庫星をもつ長男が生まれているのに、その長男を^{はいた}排他するようなことを起こしたら、という意味も含まれています。当然、衰退してゆきます。

あるいは、本人が勝手に出て行ってしまうこともあるでしょう。親がその子を排他することもあるでしょう。

天庫星の長男に出ていかれたら、その家は衰退していく

天庫星の長男に出て行かれた家は衰退して行きます。

天庫星の長男が出て行った後、代わりに次男が継いだとか、三男が継いだとか、娘がお婿さんもらって継いだとか、そのようにして継いでも、衰退して行くようになります。

ですから、天庫星の長男に出て行かれたら、その家はもう継がないほうがいいですね。

衰退していく家を継ぐ次男が可愛そうです。それなら継がないほうがよいのです。このように考えます。

つまり、その家を誰が継ぐのかによって、継いだ人物の宿命によっては、この衰退を少しだけ食い止めることができる場合もあれば、どんどん衰退する場合があります。それは跡を継いだ人の宿命によりますが、天庫星をもっている長男が出て行ったことによって、衰退するということは、事実上決まってしまうのです。

天庫星の長男が跡継ぎしないと、家系は衰退していくのですが、このことは「一族すべての人達の運が衰退していく」という意味も加わります。

その結果の禍わざわいがでるのは、遅くても孫の代には出てくると考えています。

☞ その家系の長男が、天庫星をもっていて、跡継ぎをしたことは、ほかにも影響を及ぼします。

跡取りしたことで、すべてが安定します。

つまり、家系から恩恵を受けるのは、継いだ長男だけではないということです。

一族すべての人達が恩恵を受けます。

それゆえに、長男が天庫星をもっているのであれば、まずは——これらの考え方を当てはめて、本人はどうなる、家運はどうなるのかと……というふうを考えるのです。

☞ 次男に生まれて『天庫星』をもっている場合です。

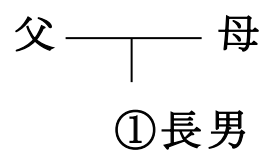
ちょっと難しいのですが、天庫星をもっているのが次男以下の場合には……。

このことは、次男・三男・四男も含まれると思ってください。

次男が天庫星を持っている場合は、その次男に跡取りの意味合いもありますが、初代になればよいのです。初代とは自分が新しく家系をつくるという意味です。

宿命（1）初代とは

両親（父と母がいます） ⇒

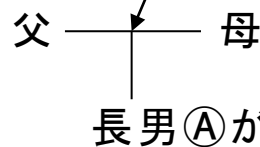


②次男

宿命（2）②次男

②の次男は家を出て、結婚して

妻を迎えて、父と母になりました



長男①Aが生まれました

この長男①Aに、跡を継がせることで、

②の次男は「初代」になります。

宿命（1）初代とは においては、**宿命（2）②次男** の次男を

〔例え〕にたとしましたけど、この話は三男も四男も含まれます。

そうしますと、次男以下の場合は、自分の代で新しい家系を興おこして、自分の長男に跡を継がせることです。そうすることで、家系は伸びていきますが、生まれた長男①が、家系を継がない場合は、初代の意味はなくなります。

生まれた長男①が天庫星をもっていないということもあるわけです。天庫星をもっているとは限りません。天庫星をもっていないけど、継がせるということもあり得ます。

長男①は天庫星をもっていないために、苦しむことになりますけど、家系はつながります。

苦しむという意味は、天庫星があれば長男の役目の星ですから、それが当たり前という感覚です。天庫星をもっていなければ、例えばですが、「なんで自分が継ぐの……」という感覚にとらわれることになるかも知れないからです。

次男以下の場合は、自分の代で新たな家系を興し、そして、
自分の長男に自分の跡を継がせること

〔たとえば〕次男に生まれて『天庫星』をもつ人は、
宿命(2)②次男のように、自分が新たな家系を興して、
自分の長男に自分の跡を継がせることで、次男は天庫
星がもつ星の意味を消化したことになるのです。
そうならば、家系とまでは行かなくても、少なくとも
本人の宿命は安定します。通常は家運も栄えます。

本人の宿命も、本人が興した新しい家系も安定する

(通常は栄える)

それゆえに、次男で天庫星をもつ人は、実家を出て、
新しい家系をつくりなさい。ということです。

新しい家系を興して、自分が初代になったら、自分の
長男に、その跡を継がせないとダメですよ。

ということは、まずは何といても、男の子が生まれ
なければ、もうそれだけでダメです。なぜダメか ➡
なぜダメなのかといえ、男子が生れなければ、長男
に跡を継がせたことにならないからです。

ですから、妻に男の子を産んでもらって、生まれて来た長男に跡を継がせることです。

それができれば、次男が独立して、興した家系は栄えて行くようになりますし、家系が続いて行くようになります。

これができればよいのですが、これができないと……家系は栄えるとか、続くということにはなりません。

☞ いままでご説明しましたのは、天庫星をもつ長男、そして、天庫星をもった次男以下の話だけですよ。

天庫星のない宿命は、この限りではありません。

天庫星をもっている場合に限ります。

それ以外の宿命については、後で出てきます。

長男であっても、絶対に跡を継いではいけません。という宿命もあります。

もう少し先に出てきます。

☞ ここまでは男性の場合です。女性は含まないです。

☞ 女性に生まれて『天庫星』をもっている場合です。

① 長男のところに嫁ぎ、その夫に長男の役目をさせること

女性自身が『天庫星』をもっているのですから……、

「長男の嫁になりなさい」ということです。

そして、夫に長男としての役目を果たさせることで、

天庫星をもたない長男が跡継ぎしたことになります。

ただし、その夫が長男としての役目を果たしていかなければ、意味がないですよ。

「跡を継ぐ」ということは、一般的には墓を守るということも含まれますが、長男が両親と一緒に暮らすことなのです。〔この場合は父方です〕

両親が離婚した場合でも、父親が中心になります。

そこには、男と女の役目の違いがあるからです。上級になって学びます

天庫星をもつ女性が、天庫星をもたない長男に嫁ぐわけですから、

天庫星をもつ妻が、天庫星をもたない長男（夫）に、

長男としての役目をさせなさいということなのです。天庫星をも

つ妻がそれを成^なせば、夫の宿命も家系も安定します。

女性の場合は、少し融通が利くわけですね。

① 長男のところに嫁ぎ、その夫に長男の役目をさせること
これが1番おすすめです。1番いいですよ。

⇒ 【天庫星】をもつ女性が、次男、または三男という
ように、次男以下と結婚した場合です。

② 天庫星をもつ女性と結婚した夫に、初代として家系を興し
てもらい、つぎの代（二代目）になる長男に跡を継がせること

【天庫星】をもつ女性が、長男以外に嫁いだ場合は、
その男性と一緒に男性の家系から出て、初代になるこ
とです。

初代になるというのは、自分の夫を初代にさせることです。

つまり【天庫星】をもつ女性が、長男以外に嫁いだ場合は、
天庫星をもつ女性の夫になった男性に、家系から出てもらい、
初代として家系を興してもらうのです。そして、二人のあい
だに生まれた長男に跡を継がせます。

ですから、女性は夫とのあいだに、跡継ぎになる男子
を産まなければいけませんね。

②のつぎに……もう一つの方法として③があります。

③ 天庫星をもつ女性が、親の跡を継いだ場合です。

『天庫星』の女性が、親の跡を継いだわけですから、養子をもろうことができます。

夫は養子になります。つまり『婿養子』ですね。

天庫星の女性が自分の家を継ぎ、夫になった(婿養子)に家長の役目をしてもらうことです。

ただし、その夫の宿命に養子運の星が必要です。

女性が婿養子もらうのですから、この夫自体に養子運が必要です。

相手の星をよく観て(養子に)もらうことです。

代表的な“養子運の星”は『天印星』です。

養子運の星をもっていないと男性が苦勞することになります。

女性自身は宿命どおりでも、婿になる男性に養子運の星がなければ、宿命どおりではないのです。

☞ 養子運の星は『天印星』だけではありません。

勉強が進みますと、ほかにも出てきます。

このように、女性はある程度融通が利くのです。

①②③のいずれでもないという場合——〔たとえば〕次男と結婚したのに「自分たちの長男に生まれた子供に跡を継がせなかった」そうなったときには、この家はもう続かなくなります。

①②③のいずれでもなければ、宿命も生きてこないし、家運も、家系のその後も、衰退するようになります。

ですから『天庫星』もっている人がいたら、その人物が生きてきた具体的なあり方（生き方の様子）を、よくお訊きして、①②③のいずれかに、当て嵌まればよいわけです。

そうすると〔この家は伸びる〕とか〔この家はダメ〕とかを、観ることができます。

各自がそれぞれの役目を果たすと、その家系は伸びて行きます。

家系が伸びるということは、すなわち子供の伸びも良いということです。

家系が伸びる ⇒ 子供の伸びもよい

ただし『天庫星』をもっている宿命の人たち、すべての家系が栄えてしまうと大変なことになります。

ゆえに「栄えない」で、その人一代で終わり、そういう人もたくさんいます。

それで当たり前なのです。

つまり、代々栄えて行くような家系を作れる人は少ないのです。

それが出来ない人（栄えない）のほうが多いと想います。

『天庫星』 終わります。

つぎは『十二大従星』最後の星「天馳星」です ➡

⇒ 天馳星 (てんそうせい)

天馳星 — 彼の世

『天馳星』は「彼の世の頂点の星」です。

“あの世の頂点”といってもわかりにくいと思いますので、此の世（現実世界）から、一番遠くに離れている時代の星、精神性の頂点と考えるとよいでしょう。

彼の世の頂点



精神の頂点

彼の世は肉体が消滅し、精神だけ残っているのです。

天馳星は精神の頂点 ⇒ 精神的に強い

精神 ————— 精神の頂点 ⇒ 精神性が強い（その分野に強い）

肉体（現実）—— 現実面に欠ける性格（現実から1番離れている）

精神の頂点ですから、精神的に強い星です。

しかも、此の世の時代から、遙か^{はる}彼方^{かなた}に離れた時代、此の世から一番遠くに存在する星ですから、現実世界から遠くかけ離れた時代です。

この世の現実から遠くかけ離れた時代



冷静な判断ができる

此の世の現実から、遙か^{はる}に遠く隔^{へだ}たった時代ですから、物事を見るときに第三者的な見方ができます。

自分のこと、まわりの出来事、それらの事象をまるで彼の世に^い居て、眺めているような、第三者の目で観ています。そういう感覚の持ち主といえます。

自分のことでも、第三者の立場で、あたかも他人事のように冷静な判断ができます。

彼の世の頂点ですから、もうまったく此の世に関係がない、此の世の現実的な^{じょう}情にとらわれないで、現実面には無関係だというような感覚を備えています。

彼の世の情理・慈愛を重んじます。

参考・情理 [ものごとのすじみち]

参考・慈愛 [親が子供をいつくしむような深い愛]

参考・執着 [心が強くひかれること。深く思い込むこと]

『天馳星』の生き方は、現実的なささいなことを気にしない、気をつかわない、何かをするときに、現実の状況に執着しゅうちやくしないやり方、生き方がよいのです。そういう質は、冷たい人にも見られやすいのです。

冷たい人にも見られやすい

天馳星をもつ人は、[たとえば] 嬉しいことがあれば、もちろん嬉しいのですが、何か素直に感情をだして心の底から喜べないような、冷めたところがあります。悲しいことが起これば、悲しいのでしょうけど、他人事のような感覚をもてます。

そのなかに入りこまないで、第三者の目でとらえてしまふ、そのような冷めた面があると考えていただければよいでしょう。

彼の世の頂点ですから、現実から遠く離れています。

その意味で現実という枠わく(仕切り)をもちません。

此の世で生きている時代は、いやでも、現実的な制約に縛られて、何事も限界があるはずです。

参考・制約〔条件を課して自由に活動させないこと〕

参考・限界〔これ以上の先は無いというぎりぎりの境〕

〔たとえば〕24時間という1日の条件を度外視して、何日も寝ない、休まないで、働くということは不可能です。1日の何時間位しか働けません。

そういう限界が個々の人たちにあるはずです。

ところが――あの世の星に限界はないのです。

そのような現実的な時間の枠は取り払われています。

いくなれば「念^{ねん}の世界」です。

「一念三千」思ったことは、瞬時に具現されます。

瞬時もない速さです。

ウィキペディアに、真空中の「光速」1秒間約30万kmと記載されています。念の速度はその17倍とも記されています。

此の世の人間は肉体がありますから、肉体が可動できる範囲内のことしかできないわけです。

でも、彼の世は、肉体という枠がないので限界を超え

るチカラを発揮できる可能性があると考えerわけです。

ばね
撥条が跳ね返るように、瞬発力が最大の星です。

瞬間に大きなチカラを発揮できる

枠がなく、限界がないので、一度に最大のエネルギーと発揮することが可能です。

それゆえに、たくさんの物事を、一度にこなすことも可能です。

しかし……そのあと、エネルギーは^か涸れてしまいます。打ち上げ花火のように、パッと輝いて、^ち散ってしまいますから、持続力に欠けます。

持続力に欠ける

『天馳星』をもつ人は、すぐにでも片付けないといけないような仕事とか、用事があるときには、なるべく短時間で、一気に集中して終えてしまう。

そういうやり方が向きます。

天馳星が集中して、一度に大きなチカラを放出するときには『十二大従星』のどの星も敵かなわない瞬しゅんぱつりよく発力を発揮できます。

そして、チカラを使い果たしたら、その後、しばらく休むことが必要です。

その意味で持続力に欠けます。

天馳星をもつ人は、なるべく短時間で集中して物事を終えてしまっていて、その後はしばらく休みます。

それから、また集中して一度に終えてしまっていて、その後しばらく休んで、というように休息を取りながらやるほうが効率は上がります。

長い時間をかけて、ダラダラとやっていると、徐々に実力が低下します。

休息を取り入れながらやり、やるときは集中すること

天馳星の人は、そういうやり方のほうが、効率が良いのです。

集中してやるときには、大きなチカラが出せますから、一度に複数の事を行ったり、あるいは、一度に複数のことを考えたり、そういうこと出来る特異な星なのです。

〔たとえば〕普段でも、お食事をしながら、テレビを観ながら、新聞を読むとか、そのようなことが自然にできるし、出来てしまう人です。

それゆえ、見た目に〔気ぜわしい〕〔落ち着きがない〕という人物、落ち着きのない子供に見られます。

一度に、あれもこれも片づけようとして、忙しく振る舞っていると、すごく気ぜわしい人に見えるわけです。

ところが――チカラを集中して出してしまうと、エネルギー、あるいは気力も無くなります。

チカラを集中して、発揮してしまうと、
エネルギーも気力も無くなってしまふ



のんびりした人、やる気のない人に見られてしまふ

その状態を他人が見たとき、のんびりした人に見えてしまい、悪くいえば、やる気のない人に見られるわけです。この両面をもつのが天馳星の一つの特徴です。

そこで……、

- ☞ 一度にいろいろな事をして、気ぜわしい人に見える、その姿をⒶとします。
- ☞ チカラを出しきって、のんびりしてやる気がないように見える姿をⒷとします。

Ⓐ 一度に複数のことを行うとか、考えたりすることができる。

Ⓑ チカラを集中して出してしまおうと、エネルギーも、気力も無くなってしまおう。

Ⓐのほうに出るのか、Ⓑのほうに出るのか、そのことについて、本人はコントロールできないのです。

これは天馳星のチカラの出し方の特徴ともいえるでしょう。彼の世の星であるために、此の世においては、どちらの質がでるのか、うまく調節できないのです。ゆえに、天馳星をもつ人は、やる気がないときは全然やる気がないのですが、やる気になったら、すごいパワーを発揮します。

それはそうなのですけど……いつやる気を出すのか、自分でうまく制御することができないといえます。そこが、天馳星をもつ人の欠点でもあるのです。

ほ か
他人の人からすれば、なにか気まぐれの人のように、一緒に仕事するにしても、歩調が合いませんよね。そのため、まわりと歩調を合わせにくい星です。

まわりと歩調を合わせにくい

そういう人ですから、仕事するとなると、とても一緒にやられていけないわけです。

『天馳星』の人物としては、時間的に自由になる環境とか、制約がなく融通が利く環境が望まれます。

時間的に自由になる、融通のきく環境のほうが伸びる

〔たとえば〕一日のなかで、〔いつやってもいいですよ〕とか、〔気分が乗ってきたときにやればいいですよ〕とか、そのような環境がふさわ相応しいのです。

最近だと、フレックス・タイムとかで、入社時間もある程度は融通がきくとか、そういう会社も増えていると思いますが、全体からみれば少ないですよ。

天馳星は、時間的制約を受けないような会社のほうがチカラを発揮できます。

あるいは、その人自身が、自由にペース配分ができる環境がよいわけです。

毎日、キチッ、キチッと、何時から何時までが仕事、何時から何時まで仕事時間、キチッと決められると、チカラをだせなくなってしまいう星です。

もう、自分の気分が乗ってきたときに、頑張ればいいと、そういう環境が一番よいのです。

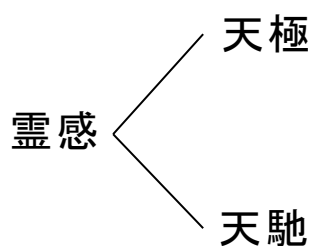
彼の世では頂点の星ですから、感性は鋭敏^{えいびん}です。

此の世の人にわからないようなこと、気がつかないようなことが、パッと閃^{ひらめ}いたりする感覚をもちます。

感性が鋭く、閃^{ひらめ}きがある

『十二大従星』のなかで、^{れいかん}靈感の要素をもっているといわれる星は【天極星】と【天馳星】の2つです。

【死人の星】と【彼の世の頂点の星】です。



もし、天馳星と天極星の両方をもっているとすれば、特に靈感の素質がある人だと占います。

【初年】46回目【十二大従星力学⑥】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】47回目【人体図三分法】です。